

外来における救急患者

突然、夜中に腹痛や不正出血に見舞われた場合、どんな人でも不安と恐怖心のためにどうしてよいか判らなくなるのが普通である。特に妊娠中であつたりすると、おなかの中の子どものこともあり、それは大変なものだと思う。産科の緊急患者さんの中には、母児共に危険な状態で運ばれてくることもあり、また緊急手術になるケースも稀ではない。

当直の夜、「急患です」と電話で起こされると、“異常がないように”と祈りながら診察室に向かう。重症な症状を呈している患者さんであれば、緊張の連続の中で緊急処置が続く。無事処置が済み、「もう心配ありませんよ」と声をかけ、患者さんやご家族から感謝の言葉を聞くと、夜中に起こされたことも忘れてしまう。

ところが、救急車のお世話になりながら大騒ぎして運ばれてきても、症状がそれほどひどくない場合等、よかったと思うどころか逆に患者さんを叱ってしまう事もある。昼間から不正出血や腹痛があったなら、誰かに知らせるなり、受診するなり方法があるはずなのに・・・。

最近では、直接電話で症状を訴えてくる患者さんも多くなった。

真夜中のお産が終わり関係書類を書いている時電話が鳴った。看護婦が対応している様子を見て、直接症状を聞いて指示してあげた方がよいと判断し、電話を代わった。

訴えを聞いたところ妊婦さんからのもので、熱は無いが風邪症状で腹痛と下痢があるとのこと。「心配ない状態だから特に症状の悪化が無ければ少し様子を見て、翌朝診察に来院するように」と説明して電話を置いた。カルテの準備をして看護婦と待ったが受診して来ないので、こちらから電話をしてもらった。「症状がよくなったので予約日に診察に行く」と答えたという。

症状が改善して受診しないなら連絡ぐらいできないのだろうか、と患者さんの態度にいらだちを覚えた。

しかし、患者さんにしてみればマンション住まいで相談したり、不安や悩みを聞いてくれる人もいない環境では、夜中でも心配で病院に問い合わせしてくるのは無理のないことと思う。病気等に対する知識もあり、積極的に症状に対して質問する患者さんも多くなった反面、しばしば常識の欠ける患者さんも目につく。日常の診察において医師も、患者さんも、本音で接する医療が求められているのではないだろうか。